

## 福岡・香椎B遺跡

所在地 福岡市東区香椎字寺熊

調査期間 第二次調査 一九九七年（平9）一月～四月

発掘機関 福岡市教育委員会

調査担当者 下村 智・瀧本正志・田上勇一郎・本田浩二郎

遺跡の種類 集落跡・河道跡

遺跡の年代 平安時代末～戦国時代

遺跡及び木簡出土遺構の概要



（福岡）

調査地は旧郡名では筑前国柏屋郡香椎となる。福岡平野の東辺部を画す多々良川から東は、三郡山系の博多湾まで達する丘陵によつて占められ、丘陵間には幾つかの谷地形が所在する。その中で香椎川水系により形成された谷は、幅一〇〇m、奥行き二kmの規模を有し、やや蛇行気味に東西方に向に伸びる。西方は開口して博多湾に面し、東方は低い峠を越えて宇美、太宰府

へと通じる。この谷の海岸から1kmほど奥に、「香椎宮編年記」に神功皇后を祭神として神龜元年に建立されたとある香椎宮（廟）が位置する。香椎B遺跡は宮からさらに五〇〇mほど谷奥に立地する。

今回の調査は宅地開発に伴うもので、計画地内にある中世～戦国期の山城の御飯ノ山城が立地する小山などの丘陵を切り崩して香椎B遺跡が立地する谷を埋め、三〇万m<sup>2</sup>の宅地を造成するものである。

調査は一九九五年～一九九八年の四年間、四次に及んだ。一九九五・九六年の調査では谷部の二二〇〇〇m<sup>2</sup>を、一九九七年・九八年では工事の関係で九五・九六年に調査のできなかつた谷部の二五〇〇m<sup>2</sup>と山城跡（御飯ノ山城）の全面的な調査とを行なつた。

調査の結果、平安時代末～戦国時代の掘立柱建物・井戸・溝・土壙墓・堂跡などの遺構が確認された。また、奈良時代～一六世紀の須恵器・土師器・備前や常滑産の陶器・中国産陶磁器の他に、木簡・生活用具や祭祀関係の木製品、瓦類の多種多様な遺物が、各遺構や整地土層から出土している。

調査地の谷は、南側の三分の一程が未調査のまま宅地となつた。そのため不明部分を残すものの、これまでの調査結果から香椎B遺跡の歴史的変遷を概観しておく。平安時代後半には、微高地に掘立柱建物が認められるが、整然と区画された地割は出現せず、自然流路や溜り、一部には水田が残る。遺構としては検出されなかつたが、安樂寺所用軒丸瓦や鎌倉時代の大型鬼瓦などの瓦類が出土しており、

られる。一六世紀には小規模な建物からなる集落となり、小堂も廃絶し墓地となる。谷部の北側に位置する山城が幾度かの改修を経て現在の形状になつたのは一六世紀後半と考えられるが、創建時期は検討中である。山城跡から一三世紀末の常滑焼の甕が出土しており、山城と直接的に結び付かないものの、地理的及び時間的関係から、弘安四年（一二八二）の弘安の役に軍事的施設として構築（使用）された可能性が指摘できる。

当地での寺院・公的施設の存在が考えられる。一一世紀後半、遅くとも一二世紀初頭には本格的整地作業が始まり、谷部に屋敷群が形成されていく。一二世紀には墨書き器（218頁図参照）が限定された地区内から多く出土するが、これらは寺熊地区に香椎宮の対宋貿易を掌握していたであろう宋人の屋敷の存在を強く示唆する。遅くとも一三世紀には南北方向の溝や柵によって区画され、調査区中央部の寺熊地区に大型の掘立柱建物を中心とした屋敷が出現する。一三世紀後半には御倉谷地区に火葬墓が造られ始める。一四世紀後半～一五世紀前半には、生水地区において、掘立柱建物の主屋、馬屋、佛堂などからなる屋敷が出現する。寺熊地区には小堂の礎石建物が

点の木簡の他に、箸、下駄、漆器碗、曲物などの木製品や土師器とともに、解体された牛の骨の一部が出土している。

(97) ×38×7 019

(1) 「卅五龍」  
 (妙カ) 

(2) 「五郎一郎」  
 (132) ×20×3 059

(3) 「(花押カ)」  
 (1) 「雲収光」  
 (2) 「大日」  
 (3) 「訓人恵」  
 (4) 「」  
 (5) 「」  
 (6) 「」  
 (7) 「」  
 (8) 「」  
 (9) 「」  
 (10) 「」  
 (11) 「」  
 (12) 「」  
 (13) 「」  
 (14) 「」  
 (15) 「」  
 (16) 「」  
 (17) 「」  
 (18) 「」  
 (19) 「」  
 (20) 「」  
 (21) 「」  
 (22) 「」  
 (23) 「」  
 (24) 「」  
 (25) 「」

(1)の下端部は、切り折りによる欠失。(2)は上部を欠き、○三|三|型式の可能性も残るが、付札であろう。五郎一郎は荷主名か。(3)は同字が並び、経文などの習書の可能性が高い。

(1)の下端部は、切り折りによる欠失。(2)は上部を欠き、○三三型式の可能性も残るが、付けであろう。五郎二郎は荷主名か。(3)は同字が並び、経文などの習書の可能性が高い。

木簡の釈説については、九州大学の佐伯弘次・坂上康俊、九州歴史資料館の倉住靖彦の各氏からご教示を受けた。



香椎B遺跡出土墨書磁器

